

国語

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

父とともにアメリカに渡った十九歳の佐々伸子は、同地の大学で苦学しながら比較言語学を研究する三十五歳の佃一郎と出会って、結婚した。帰国した二人は、一時的に伸子の実家で暮らした後、独立して家を構えた。

彼らの家には、訪問客というものがなかった。

高等教育を、日本で受けなかったせいであろう。佃に友だちと呼ぶ者はほとんどなかった。

佃は、夜よく近所へ散歩に出た。伸子もついて出た。彼らは榎や檜葉類を少しずつ買った。それらを、西日のさす崖ぶちや、むき出しな格子の左右に植えた。この辺は、遠くに小石川台の梢を望むぎりで、立てこんだ各の家には、木らしい木の生える余地もなかった。榎は路地の中で、青々と、子供の目をひくらしかった。午後、小学校のひけごろになると、男の子たちが、その二本の、四尺たらずの榎の周囲に、いつとなく集まった。

「おい、何だい、この樹」

「松だよ」

「違いますよ、松じゃあねえよっと。松の葉は触るとちくちくするよ」

ひっそりしたかと思うと、いきなり一人が叫んだ。

「あら！ あら！ わあるいの」

するともう一つの、ひそひそ声が臆病らしくいった。

「叱られるよ」

佃が家にいると、伸子は悩ましい思いをした。彼は、そんな声を聞きつけると、大人対^{あいて}手のように険^①しい顔つきになった。そつと下駄^{げた}を下げて来て庭へ回し、板塀についている切り戸へ忍びよった。彼は、音を立てずに掛け金はずすと、突然姿を現わし、物もいわずに子供たちに向かつて近づいて行^②った。ひそひそしていた連中^③はイチモクサンに逃げ出す。狭い路地に入り乱れてびびく足音が、子供の本気な恐怖を語った。たび重なると、滑稽を越えて、伸子は変に寥^{さび}しい、浅間しいような気がした。

「仕方がないのね、珍しいからよ。——庭へ入れた方がいいわ」

佃は興奮しつつ、神経質^{いらだ}な焦立ちで、

「折角ひとが植えたものを、むしるなんてけしからん。僕はなかへは入れませんよ、けっして」

伸子は、彼の、頑固な所有欲というようなものを感じるのであつた。

散歩に出て伸子が買ったがるのは植木より本であつた。古本屋をよく見た。何か目につくと、彼女はそれをぬき出し、「これ」

と夫に示した。佃は、その本を手にとって、あっちこち返して見て、ききかえした。

「ぜひなくてはならないもの」

その調子が、伸子をしょんぼりさせた。彼女はあきらめて本を元のところに返した。

「——じゃあ又にするわ」

伸子は、買^④つても、買わないと同じように、さっぱりしないのを知っていた。彼女は、夫婦として暮らして見ると、佃が、も^aからたつぷりしない暮らしを経験していながら、なれて大胆に快活に、それを支配することを知らないのを意外に感じた。

伸子は、大概家にいた。本を読んだり、崖下に井戸がある、その井戸端で、長屋の女たちがしゃべるのを聴いたりしていた。永く一日が過ぎる。彼女は、佃が帰るのを待ち切った。彼女は、堤^bを切ったように話したが、彼にもしやべってもらいたがつた。けれども、佃は、伸子が面白がることを、あまり面白いとは思感しないらしかった。あまり身を入れて聞かなかつた。気が乗って彼

の話すのは、多く勤め先の出来事、同僚のうわさであった。佃は、低い、これはお前にだけ話すのだが、という意味を示した声でいった。

「今日、幹事のところへ用があつて二三度行ったら、堤君が、私に小さい声で、幹事に何かご用ですか、ときいた」

「ふうむ、それで？」

「私は、ええちよつと相談があります、といっただけだが——皆気の毒に神経質だ。私なんか幹事だろうがだれだろうが、平気で行って話すから、きつと皆、意外に思っているんでしよう」

佃は、それが得意でなくもない。——

「ゴ—ゴリね」

と笑うが、心のうちで伸子は、夫もその中で、明かに小勤人こづとめにんの一役を受け持っているのを感じ、彼がそれを不平ともしないことに哀愁を感じた。

⑥ 秋が進んだ。庭に、月がさした。その月の光は崖下の櫛比しつびした屋根屋根を照らし、終夜、床下で虫が鳴いた。霜が下りるようになってから、まだ暗い午前六時ごろ、寒く凍った道路を、工場へ出かける人々の朴菌（注4）の音が、伸子の寝ている枕に響いて来た。

伸子は、だんだん自分の心に切ない渣滓おろがたまって来るのを感じた。彼女は毎日絶え間なく飢えていた。それらは、誇るに足るほど高い程度のものではなかったにしろ、内的に育つ盛りの若い伸子にとって、食物と同じに必要な芸術的雰囲気（注5）の欠乏が、深く彼女を苦しめた。佃は、長年アメリカの女の生活を見なれていながら、寝たいだけ伸子を眠らせた。日常の買物も自分で厭いとわずした。台所さえ伸子一人ではつねんとしなくてよかった。しかし、眠り足りたスポンジのような頭脳で、むさぼり読み、感じ考えたとしても、それを共に語るに誰がいよう！ 佃は、近ごろのように生活がきまってしまうと、ちよいちよいしたこれまでの精神上の荷物を、どこへかおろしてしまつたように見えた。——彼の文学は、数年前の貯蔵であるシェクスピア、ベーコン問題から進まず、雑誌さえ、恐らく一冊以上目を通すことはなかった。彼は、それでも本能的に教師らしいところがあつて、うまく伸子の突撃をかわすシュレンはある。——⑧ これは何と異様な孤独だろう。伸子は恐ろしい絶望的な寂寥せきりように打たれて、激しく泣き出すことがあつ

た。

「ああ、なぜこんなに寂しいの？ 寂しいの？……もう少し、どうにかしましょうよ」

佃は、当惑し、眉をひそめ、伸子を抱いて背をなでながら、なだめるように顔をよせて、繰り返し繰り返しさやいた。

「そんなに泣くもんじゃありません、ね、今によくやる。——今になれます」

そのなれるということこそ、何より伸子がこわがっているのであった。人間が、飼われた獣と同じように、やがてはどんな境遇にでもなれるという事実は、悲しく、恐ろしい。自分も、今にやはり、この生活になれてしまうのだろうか？ そして、幾年か経つうちには、趣味も、情熱も失い、最初成ろうと目ざしていた者とは似ても似つかない者になって、そうなってしまったのさえ知らず、一生を終わるのだろうか？ 伸子は、目に見えないうちにすぎ去る生活を惜しみ、不安に襲われた。——

三月になってから、ある日、動坂^{（注5）}へ行った。親戚の子供が来あわせてにぎやかであった。皆を集めて、和一郎^{（注6）}が写真をとった。それがすむと、和一郎は伸子だけを、また別に迎えに来た。

「今日は光線の工合^{（注7）}がいいから、姉さんだけでもう一枚とらない？」

「そうね」

伸子は、元来よそゆきになって、商売人に写真をうつされることがきらいであった。彼女は、弟にすすめられると、近ごろ自分がどんなに見えるのか、と好奇心をもった。

「じゃあ、とつてもらおうかしら……でも、ぼやぼや幽霊みたいなのはいやよ」

「大丈夫さ！ こんな天気にくくじるなんて、決してありやあしないさ」

伸子は、弟と連れ立って客間の庭に回った。そして、木犀^{（注8）}の前に立った。

数日後行くと、それが現像できていた。

「ちように乾かしたところよ、もういいだろう」

伸子は、一緒に和一郎の仕事部屋へ行って見た。洗濯場の奥を区切り、薬品を沢山並べた小窓のところに、印画^{（注9）}が乾かしてあつ

た。

「まあ何枚もあるのね、皆あの時の？」

「ううん、あとでつや子と大学のご殿へ遊びに行った時のもある。——こないだのだけじゃあ、まだフィルムがたまってたもんだから」

「どれ……拝見」

「これが大学で撮ったの」

つや子が、兄とふざけて、笑いながらこちらを向いて来るところを、不意に撮ったと見え、手脚の動きがリットウ的^⑩で美しく見えた。

「これがこないだの。元ちゃんが少し動いたんでばやけちゃった。——姉さん一人の方がいいや」

「そう？」

伸子は、セピアにやきつけた一枚を渡された。印画としてはきれいに仕上がっていた。けれども、最初の一瞥^⑪で、伸子はその写真が、自分に相違ないのに、すらりと承知できかねる変な感じを受けた。自分と思っていたのとはどこか違うものが、正面を向いて両手を束ねた顔にみなぎっていた。こんな太い縦の陰翳^{いんえい}が、二本も、もともと自分の眉の上にあっただろうか。老けた、複雑な、険しい顔つきであった。それなのに、口もとばかりに、穏やかに穏やかにと、取りツクロわれたような微笑があつて、醜い顔であった。

「私の顔本当にこんな？」

ききたいぐらいであった。

伸子はずくづく自分の顔をながめた。

いつまでも黙っているのを、和一郎は、写真に不満なのだと思つたらしい。彼は弁解的に云った。

「もう少し、全体濃くてもよかったな、この次、またやきなおして上げましょうね」

「これで結構よ、ありがとう」

伸子は、写真を、もう一遍見なおしながら、いった。

「よく——はつきり撮れているわ」

(宮本百合子『伸子』による)

(注1) 小石川台＝東京の地名。

(注2) ゴーゴリ＝ロシアの小説家・劇作家(一八〇九―一八五二)。下級官吏を主人公にした作品を発表している。

(注3) 櫛比した＝くしの歯のように隙間なく並んでいる様子。

(注4) 朴歯＝朴の木で作った下駄。

(注5) 動坂＝伸子の実家がある地名。

(注6) 印画＝写真をプリントする紙。

〔問一〕問八については、マークシートの所定の欄に記入しなさい。問九・問十については、記述式解答用紙の所定の欄に記入しなさい。〕

問一 二重傍線 a b c の語句の意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、その番号をマークしなさい。

a たつぷりしない

- 1 訪問客の少ない
- 2 時間的に余裕のない

- 3 経済的にゆとりのない
- 4 友だちとの交流がほとんどない

b 堤を切ったように

- 1 一気に
- 2 待ちかねて

- 3 熱心に
- 4 大急ぎで

c 眠り足りたスポンジのような

- 1 十分な休息を取ったことに満足した

- 2 休息を取ったので、多くを吸収できそうな

- 3 休息を取り過ぎてしまい、ぼんやりとした

- 4 多くのことを十分に吸収したので、飽和した

問二 傍線③「伸子は変に寥しい、浅間しいような気がした」とはどのような心情か、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 佃が子供たちに与えた恐怖心を申し訳ないと思うとともに、子供たちに対しても大人対手のように振る舞う佃を軽蔑する心情

- 2 子供たちに寛容になれない佃の度量の狭さに失望するとともに、自分の植えた木にどこまでもこだわる佃の執着にあきれていてる心情

- 3 せっかくの訪問客である子供たちが逃げ出してしまうことを残念に思うとともに、子供たちを追い払ってしまう佃に腹立たしさを覚える心情

- 4 子供たちに無言で近づく佃の様子におかしさを感じるとともに、子供たちを庭に入れることを頑なに拒否する佃の態度を浅はかに感じる心情

問三 傍線④「買っても、買わないと同じように、さっぱりしない」とはどのようなことか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 佃が価値を認めない本を買い、読んでみても、その本から得る利益は少ないだろうということ
- 2 佃の反対を押し切って多くの本を買うと、佃が不愉快になり、夫婦関係が悪化してしまうということ
- 3 伸子が関心を持つ本に佃が興味を示さないため、本を買っても満ち足りた気持ちにならないということ
- 4 本を買うと所有欲を満たすことはできるが、生活が苦しくなるため、晴れやかな気持ちになれないということ

問四 傍線⑤「彼がそれを不平ともしないことに哀愁を感じた」のはなぜか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 佃の能力や経歴から言えばもっと高い役職に就けるはずなのに、現状では低い地位に甘んじているから。
- 2 佃は職場での地位が低いにもかかわらず、幹事と平気で話そうと努力している点にけなげさを感じたから。
- 3 佃は職場の幹事と平気で話せることだけで満足し、より大きな目的や希望、向上心を失ってしまっているから。
- 4 佃は職場で些細な役割を担っているに過ぎないのに、自分がさも仕事上の重要人物であるかのように振る舞っているから。

問五 傍線⑥「秋が進んだ」とあるが、秋の描写はどのような効果を持つか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 伸子が佃に抱く焦立ちをますます強めていくことを示す効果
- 2 伸子が佃との関係に抱く欠乏感を一層、際立たせていく効果
- 3 伸子が佃との生活を改善していこうとする未来を暗示する効果
- 4 伸子が佃に感じる浅間しさをさらに募らせることを暗示する効果

問六 傍線⑨「これは何と異様な孤独だろう」とあるが、なぜ「異様」と言えるのか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 伸子を感じる孤独は、他人が共感できないほど絶望的なものだから。
- 2 佃は、日本人の伸子にアメリカの女のような生き方を要求しているから。
- 3 伸子は、佃が優しく振る舞えば振る舞うほど、一層、寂寥を感じていくから。
- 4 佃は、妻である伸子に対しても、教師らしい優しい態度で接しようとするから。

問七 傍線⑪「セピアにやきつけた一枚」を見た伸子の心情の説明として、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 写真に写る自分の顔つきに嫌悪感を抱いたが、つくづく自分の顔をながめているうちに、その写真はきれいに仕上がっていると思い直した。
- 2 写真に写る自分の顔つきを認めなくなかったが、しばらくながめていると、そこに自分の内面の変化も明確に写し出されていることを自覚した。
- 3 写真に写る自分の顔に最初は違和感を覚えたが、いつまでもながめていると、これこそが現在の自分の年齢にふさわしい顔つきであると納得した。
- 4 写真に写った自分の顔が、自分で考えていた顔つきとは異なっていたため、和一郎の写真の技術に不満を抱き、もう写真は撮りたくないと思った。

問八 本文の内容や表現・叙述の説明として適当でないものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 伸子には目ざしている目標や理想がある。
- 2 時間が省略されたり、圧縮されたりして表現されている。
- 3 語り手は伸子と佃の心理を、それぞれの立場から表している。
- 4 複数回生じた同一の出来事が、ただ一回だけで叙述されている。

問九 傍線⑦「精神上の荷物」に最も近い意味の語句を本文中から抜き出しなさい。

問十 傍線①②⑧⑩⑫のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。文字は大きく鮮明に書きなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ラフカディオ・ハーンは日本人の表情について鋭い観察をのこした人である。彼があるとき三人の婦人と汽車に乗りあわした。彼女らは左の袂で顔をかくし、こくりこくり居眠りしている。それは「まるで流れのゆるい小川に咲いている蓮の花のようだ」とハーンは書いている。（『心』平井呈一訳）

寝顔が美しいかどうか、それは当人にはわからない、当人にわかっていることは、ひょっとすると不用意な顔をみせるのではないかということだ。不用意に自分の表情をさらけ出す、これがこまったことなのだ。少なくとも昔の女性のたしなみにはなかったことだ。

袂で顔をかくすというのは、時には愁いを時には恥かしさを、つまりはあらわな表情をひとに見せまいとするしぐさであって、このしぐさが伝統的なつつしみの表現であることはいうまでもない。

和服姿のめつきり少なくなったトウコン、——それも「晴れ姿」のみで、着つけもろくにできない娘たちが、袂の袖で顔をかくすかどうか、そのようなことについて確かなことをいう自信はまったくないが、しかし、ハーンが袂の袖にかくされた顔を美しいと感じたことは確かだし、またこのシタイを日本人の微笑とむすびつけて考えていたのは、なるほど鋭い観察だったと思われる。

ハーンはさきの話につづけて次のように言っている。「わたしの家で長年使っていた下男があつたが、この男のことを、わたしはふだんからしごく快活な、後生楽な男とばかり思っていた。物を言いかけると、この男はいつでもけらけら笑っている。（中略）ところが、ある日のこと、この男が自分ひとりであるときに、わたしはそつとのぞいて見て、まるでこの男が気のゆるんだ顔をしているのに驚いたことがある。いままでこつちが知っていた顔とはまるで打って変わった顔つきなのだ。心の痛みと腹立ちのこわい皺があらわれて、年が二十も老けて見えた。わたしはエヘンと咳払いをして、自分のいることを知らせてやった。すると、たちまちその顔がやわらいで、まるで若返りの奇跡にあつたようにはっと明るくなったのである。」（同上）

ひとは「この男」のこの笑いをどう解釈するか。面従腹背と攻撃するか。それともおセジ^⑦笑いの欺瞞^{ぎまん}を指摘するか。それとも、例によつての不可解な日本人の笑いをうんぬんするか。ハーンはちがう。彼は言っている。「これなどは、じつに、ふだん自分を殺しつけている自制の奇跡である。」わたしもこれと同じ考えである。日本人の笑いは主として自制の笑いであると思う。自制がさらにきびしいばあいには、その笑いすら、袂の袖でかくしてしまふ。高らかに笑うことが不自然であると人が感じるとき、笑いはこのように抑制的なものとなった。

微笑つまりエミと、それからワライとの区別をきびしくつけたのは柳田国男^{（注）}であつた。ワライにはかならず声があり、エミには少しもない。ワライのばあい、時には相手に不快感を与える。やさしい気持の伴っていないワライもある。それに反し「エミには如何なる場合もそういうことがない。是が明らかなる一つの差別であつた。」（「女の咲顔^{えがお}」）

つまり柳田説によると、一座の中で笑っている人が若干おり、それとの同調でホホエンでいる人が、笑う人よりもっと数多くいたのだ。公然たる笑いではなく、A「笑う人に向つての一種の会釈^{むか}」だったという。「こんなことに笑いこけるのは、はしたないと内心では思つても、自分ばかりつんとしていては、反感を表示したことになる。人が楽しみ又はいい気になっている場合が、ことにまわりの者のエガオの必要な時だったので、是を雷同附和とは誰も見ていないのである。」（同上）

笑いがもし哲学的解釈を必要とするむつかしい現象だとすれば、微笑は社会心理学的——それもきわめて微妙な——解釈を必要とするむつかしい現象だ。

個人差——というようなことは今はさておいて、ハーンや柳田が提示したような微笑、これは日本人固有のものだろうか。ある意味ではそうではないと思う。私の出会つた数少ない国々の人は、B共感の微笑をもらす。フランス語の *sourire* ということばは、ほとんど正確に日本語の微笑にあたる。

イギリスのかなり格式ばつたパーティで、日本婦人が笑い——それもおそらくは微笑をかくすべく口もとを手でおおつたところが、それがはなはだ非礼としてとがめられたという話があるが、真偽のほどはどうであろうか。顔にしょっちゅう手をあてることが作法になつていないことは当然であろうが、しかし、笑いをかくす動作を、もしかりに不作法だと思ふ人がいたとすればかな

り人間の表情とその表現について鈍感な人ではあるまいか。

⑨ 会釈としての微笑はおそらくどの国の人びとも共通の表情である。とはいっても、たとえばさきにいったフランス語の *sourire* には人を小馬鹿にしたうすら笑いという意味もあり、われわれの「微笑」にはそのような意味はすこしもないことには注意しなければならない。つまり、会釈としての微笑は、わが国では社会にひろく行きわたった自制としての微笑となっている。これは「文化」として、わが国にははっきり定着しているということだ。

C、私たちは文化にしたがって人の微笑の意味を正確に読みとるが、それは文化を異にする他国の人には、かならずしも正しく通じはしないということである。

⑩ 柳田国男は微笑をけつして付和雷同の笑いではないといった。たしかに人につられて笑うといったものではないが、しかし、他人との同調がほとんど自発的とみえるくらいごく自然に行なわれている社会での、これは目立った表情なのである。

私たちは長いあいだ微笑しつづけてきた。とりわけ「目上」の人に対して。それはほとんど第二の天性である。会釈としての微笑、これは外国人に理解される。しかし自制としての微笑、これは時にひとを感動させ、ときにひとをまどわせる。しかも、私たちは、自制としての微笑から、さらに内に屈折し、複雑化した「微笑」の笑いに移ってきた。

ハーンは微笑に自制心をみたわけだが、「微笑」というのは「小」に通ずる。「小股こまたの切れあがった」とか「小手をかざす」とかいふときのあの「小」である。「小手」という手の部分があるのではない。それは手を「ちよつと」かざすという意味なのである。その「ちよつと」とは、抑制のきいた、自制心のあるという意味をおわせている。そういえば、人を呼ぶとき「ちよつと」と呼びかけるのは、呼びかけというどうしようもない不作法に対する和らげの気持からである。もつとも、今では「ちよつと」ということばもすたれてきたし、「小」は小生意気とか小ざかしいとか、悪い意味のものばかりが残っているような気がする。

⑪ 抑制よりも攻撃の方に、力点がうつりつつある。これは文化としては一種の後退現象である。

(多田道太郎『しぐさの日本文化』による)

(注1) ラフカディオ・ハーンⅡ英文学者、小説家。小泉八雲。

(注2) 後生楽なⅡ何ごととも苦にせず、のん気なこと。

(注3) 柳田国男Ⅱ民俗学者。民間伝承を研究。

〔問一〕問七については、マークシートの所定の欄に記入しなさい。問八・問九については、記述式解答用紙の所定の欄に記入しなさい。〕

問一 ☐ A B Cに入る最も適当な語句をそれぞれ次の中から選び、その番号をマークしなさい。(同じ番号を二度以上選ばないこと。)

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| 1 | しかし | 2 | しかも | 3 | だから | 4 | むしろ | 5 | やはり |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|

問二 傍線①「たしなみ」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|----|---|----|---|-----|
| 1 | 心掛け | 2 | 好み | 3 | 所作 | 4 | 見たい |
|---|-----|---|----|---|----|---|-----|

問三 傍線④「袂の袖にかくされた顔を美しいと感じた」はどのようなことを表しているか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 汽車がゆれたときに袖がはずれて、現れた顔を見て美しいと感じたこと
- 2 袖にかくされた顔を想像して、まことに美しいと感動したこと
- 3 袖で顔をかくす所作を自重じちようの現れと考えて美しいと感じたこと
- 4 顔をかくすことで全体の印象をよくしようとする努力に感激したこと

問四 傍線⑥「この男はいつでもけらけら笑っている」とあるが、男の笑いをハーンはどのように捉えたか、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 見せかけは心よく服従しているが、実は主人のことをよく思っていない。
- 2 主人のことをほめたたえているが、実は主人を敬っているわけではない。
- 3 心底主人のことを尊敬しているので、それが表情に出ている。
- 4 自己の思いを主人に悟られないように、笑いでかくしている。

問五 傍線a b c d「まるで」を意味・用法によって二つに分けるとどうなるか、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-----------|---|-----------|---|-----------|---|-----------|
| 1 | a b と c d | 2 | a d と b c | 3 | a b d と c | 4 | a と b c d |
|---|-----------|---|-----------|---|-----------|---|-----------|

問六 傍線⑨「会釈としての微笑」の説明として、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 外国では人を小馬鹿にしたうすら笑いと捉えられるので、人々は微笑を自制している。
- 2 外国でひろく行きわたっているが、わが国ではまったく定着していない。
- 3 わが国では独自の文化である自製の微笑となっており、社会に定着している。
- 4 わが国でひろく行きわたり外国人に理解されるが、ときに人をまどわせる。

問七 傍線⑩「付和雷同」から意味が最も遠く離れる語を次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 賛成
- 2 追隨
- 3 独歩
- 4 盲従

問八 傍線⑪「抑制よりも攻撃の方に、力点がうつりつつある」とあるが、「微笑」に攻撃の要素が加わるとどうなるか、本文中から十三字で抜き出しなさい。

問九 傍線②③⑤⑦⑧のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。文字は大きく鮮明に書きなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。この文章は、夏山繁木が若侍に対し、歌人の評を聞かせる場面を描いています。

「延喜^(注1)の御時に、古今抄^(注2)せられし折、貫之はさらなり、忠岑^(注3)や躬恒^(注4)などは、御書所に召されてさぶらひけるほどに、四月二日なりしかば、まだ忍び音の頃にて、いみじく興じおはします。貫之召し出でて、歌つかうまつらしめたまへり。」

こと夏はいかが鳴きけむほととぎすこの宵ばかりあやしきぞなき

それをだに、けやけきことに思ひたまへしに、同じ御時、御遊びありし夜、御前の御階^(注5)のもとに躬恒を召して、「月を弓張^(注6)といふ心はなにの心ぞ。これがよしつかうまつれ」と仰せ言ありしかば、

i 照る月を弓張としも言ふことは山辺をさしていればなりけりと申したるを、いみじう感ぜさせたまひて、大桂^(注7)たまひて、肩にうちかくるままに、

ii 白雲のこのかたにしもおりあるは天つ風こそ吹きてきぬらし

いみじかりしものかな。さばかりの者に、近う召しよせて勅禄^(注8)たまはすべきことならねど、そしり申す人のなきも、君の重くおはしまし、また躬恒が和歌の道にゆるされたとこそ、思ひA。かの遊女^(注9)どもの、歌よみ、感たまはるは、さぞはべる。院^(注10)にならせたまひ、都離れたる所なれば」と言ふこそ、あまりにおよすけたれ。

この侍問ふ。「円融^(注11)院の紫野の子^(注12)の日の日、曾禰^(注13)好忠いかにほりけることぞ」と言へば、「それぞれ、いと興にはべりしことなり。さばかりのことに、上下^(注14)をえらばず和歌を賞せさせたまはむに、げに入らまほしきことにはべれど、かくろへにて、優^(注15)なる歌をよみ出ださむだに、いと無礼にはべるべきことに、座に、ただつきにつきたりし、あさましくはべりしことぞかし。小野宮殿^(注16)・閑院^(注17)大将殿などぞかし、「引き立てよ、引き立てよ」と、おきてさせたまひしは。躬恒^(注18)が別禄^(注19)たまはるに、たとしへなき歌よみなりかし。歌いみじくとも、折節・切り目を見て、つかうまつるべきなり。けしうはあらぬ歌よみなれど、辛う劣りにしことぞかし」と言ふ。

（注1）延喜の御時えんぎ 醍醐天皇たいごの御代みよ。

（注2）古今 Ⅱ 『古今和歌集』。

（注3）忍び音 Ⅱ ほととぎすは五月になつて鳴く鳥とされ、四月の鳴き声をこのように呼んで珍重した。

（注4）院にならせたまひ Ⅱ 宇多法皇がすでに退位して上皇におなりになつて。

（注5）およすけたれ Ⅱ 老巧ぶつた態度であるよ。

（注6）円融院の紫野の子の日の日 Ⅱ 正月最初の「子の日」に野外に出て、小松を引き抜き若菜を摘んで長寿を祝う遊びがあつた。

この日の歌会に、呼ばれてもない曾禰好忠が勝手に参上して座に着き、「速やかにまかり出でよ」との命令も聞き入れなかつたため、参加者らによつて無理やり幕の外へ追い出されるといふ逸話が『今昔物語集』に載る。

（注7）かくろへにて Ⅱ （座につかず）物陰でひそかに。

（注8）小野宮殿 Ⅱ 藤原実資。円融院の側近。

（注9）閑院大將殿 Ⅱ 藤原朝光。円融院の側近。

〔全問、マークシートの所定の欄に記入しなさい。〕

問一 Aに入る語として最も適當なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|-------|---|-------|
| 1 | たまひき | 2 | たまへき | 3 | たまひしか | 4 | たまへしか |
|---|------|---|------|---|-------|---|-------|

問二 傍線①「貫之はさらなり、忠岑や躬恒など」とあるが、この三人とともに『古今和歌集』撰進の勅命を受けた人物を次の中から一人選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | |
|--------|-------|-------|--------|
| 1 在原業平 | 2 紀友則 | 3 額田王 | 4 藤原定家 |
|--------|-------|-------|--------|

問三 傍線②「歌つかうまつらしめたまへり」、④「申したる」の主体をそれぞれ次の中から選び、その番号をマークしなさい。（同じ番号を二度以上選ばないこと。）

- | | | | | |
|--------|------|--------|------|------|
| 1 夏山繁木 | 2 若侍 | 3 醍醐天皇 | 4 貫之 | 5 躬恒 |
|--------|------|--------|------|------|

問四 傍線③「あやしき」、⑤「いみじかりし」、⑦「けしうはあらぬ」の意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、その番号をマークしなさい。

③「あやしき」

- | | | | |
|--------|---------|------------------------------|-------------------------------|
| 1 憎らしい | 2 聞き苦しい | 3 折に <small>かな</small> 適っている | 4 不思議に心 <small>ひ</small> 惹かれる |
|--------|---------|------------------------------|-------------------------------|

⑤「いみじかりし」

- | | | |
|--------------|-------------|---------------|
| 1 恐れ多いことであった | 2 大変すばらしかった | 3 出しゃばりすぎであった |
| 4 ひどい出来であった | | |

⑦「けしうはあらぬ」

- | | | | |
|----------|-----------|-------------|---------|
| 1 上手くはない | 2 合点がいかない | 3 際立った特徴がない | 4 悪くはない |
|----------|-----------|-------------|---------|

問五 和歌 i 「照る月を弓張としも言ふことは山辺をさしていればなりけり」の歌が詠まれた事情や背景として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 月のことを「弓張」と言う理由について天皇に申し上げた歌である。
- 2 山辺に沈んでゆく月に向かって弓を射た経緯について説明した歌である。
- 3 照る月が山辺に沈みきるまで天皇の側^{そば}に居たいという意味を表明した歌である。
- 4 照る月が山辺に沈みきるまで側に居よという天皇の命令に返答した歌である。

問六 和歌 ii 「白雲のこのかたにしもおりゐるは天つ風こそ吹きてきぬらし」の技法や表現に関する説明として適当でないものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 「このかたに」の「かた」は「方」と「肩」の掛詞である。
- 2 「白雲」「天つ風」は縁語で、大桂が天皇の恵みによるものであることを比喻する表現である。
- 3 「おりゐる」の「ゐる」は、天皇の側に仕えていることと、弓を射ることを掛けた表現である。
- 4 「おり」「きぬ」はそれぞれ桂の縁語で、「下り」と「織り」、「来ぬ」と「着ぬ」の掛詞である。

問七 傍線⑥「げに入らまほしきことにはべれど」とあるが、この表現の意図することとして最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 本当に曾禰好忠はその席に押し入ってしまったのだと、好忠の行動の異様さについて念押ししている。
- 2 自分自身も是非その歌詠みの席に加わりたかったと、晴れの舞台に対する繁木自身の憧れを表現している。
- 3 殿上人たちの晴れの舞台なので本当は部外者が入ってはいけなかったと、場の特殊性について説明している。
- 4 曾禰好忠が歌詠みとしてその席に加わりたいと思う気持ちは分かると、好忠の行動に一応の理解を示している。

問八 この文章に描かれた逸話の語り手である夏山繁木が重視しているのはどのようなことか、最も適当なものを次の中から選び、

その番号をマークしなさい。

- 1 天皇への敬意を示すこと
- 2 時と場合に応じた行動を取ること
- 3 和歌を上手に詠めること
- 4 上下関係をわきまえて行動すること